会 議 記 録

次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第2回瀬戸・高松広域連携中枢都市圏ビジョン（仮称） 策定懇談会
開催日時	平成27年8月28日（金） 13時30分～15時30分
開催場所	高松市男女共同参画センター 第8会議室
議 題	(1)連携中枢都市宣言（案）について (2)「瀬戸・高松広域連携中枢都市圏」の取組事業等について (3)その他
公開の区分	☒ 公開 ☐ 一部公開 ☐ 非公開
上記理由	
出席委員	井原会長、嘉門副会長、板倉委員、佐野委員、柴田委員、 神内委員、滝川委員、常川委員、徳増委員、三井委員、 宮本委員、好井委員、吉田委員
傍 聴 者	1 人 （定員5人）
担当課および 連絡先	政策課（839-2135）

会議経過及び会議結果

会議の概要は、次のとおり

議題(1)連携中枢都市宣言書(案)について

【別添資料により、連携中枢都市宣言（案）について事務局から説明】

(委員)

宣言（案）1ページに「我々地方自治体には、地域から人口を減らさないため、東京圏などへの若者の人口流出に歯止めをかけるべく、地域が一丸となった、戦略的かつ的確な対応が求められ」と述べられているが、もう少し連携を図る目的を明確に市長が宣言しなければ近隣市町はついていけないのではないかと

(委員)

そこは私も気になった。「人口を減らさないため」に「若者の人口流出に歯止めをかける」という部分が、短絡的である。私自身子どもが2人いるが、2人とも県外の大学に出ている。若者が、都会に行きたい、県外に出て何かを学びたいということに、歯止めをかけるべきではない。県外でいろいろなことを学んで、帰って来てくれる魅力ある県にしてもらいたい。囲い込みよりも、魅力があるから、帰ってきてももらえる、県外の人に来てくれるという方向で訴えていくべきである。

また、出生率は、2.06以上なら人口が増えていくと聞いているが、3人、4人と産んでももらえるような、子育てに適した環境づくりによって、子どもを増やしていく、流出に歯止めをかけるのではなくて、生まれてくる子どもを増やしていくということを加えていただきたい。

会議経過及び会議結果

(委員)

今の意見に大いに賛成である。

なお、1ページの中段に「創造性豊かな海園・田園・人間都市づくり」とあるが、この「人間都市づくり」の意味がよくわからない。もう少しわかりやすい表現にした方が良くはないか。

(委員)

14ページに戦略的な観光施策として書かれていることは、コンベンションビューロがこれまで取り組んできた内容である。新たにということであれば、「インバウンドの促進」などを入れてはどうか。

(副会長)

宣言は市長が行うものなので、その内容について、とやかく言うべきものではない。あえて言うとするれば、この懇談会は定住自立圏構想からの引き続きの会であるが、この宣言(案)では、定住自立圏構想のときには、人口減少、少子・超高齢化社会の到来を考えていなかったという文章になっている。しかし、そんなことはないのだから、「しかしながら、・・・」の段落は削除すべきである。

第三者的な観点で言うと、1行目「世界の宝石とも称される瀬戸内海」とあるが、「瀬戸内海」が「宝石」というのは論理的におかしい。瀬戸内海の島々が「宝石」というイメージであれば理解できるが、瀬戸内海という大きな海が「宝石」というのは理解できない。高松市では通じるのかもしれないが、第三者からすればおかしいと思う。

(会長)

瀬戸内海をどう見るかというときに、歴史的な引用がある。その中で、一番良く知られているのが、小西和の「瀬戸内海論」の序文に新渡戸稲造が指摘した「瀬戸内海は世界の宝石」というのがある。これを引用されたのではないか。

(事務局)

まず、宣言文については、市長にお任せいただきたい。「世界の宝石とも称される瀬戸内海」の表現は、会長から説明があったとおり、新渡戸稲造が書いた小西和の「瀬戸内海論」の序文から引用したものである。香川県においても瀬戸内海国立公園指定80周年記念などでも同様に引用しているということもある。

(副会長)

瀬戸内海は世界の「宝」というのであれば理解できるが「宝石」となると、やはりおかしいと思う。

(会長)

プレゼンテーションをする際、誤解を受けないために、言葉を選んだ方がいいですよというアドバイスにすぎないと思っていただきたい。

(事務局)

他に御意見をいただいたものについてであるが、「人間都市づくり」の表現については、現在の定住自立圏のビジョンにおいて掲げているものと同じである。また、「しかしながら・・・」の段落の削除については、御意見としてお聞きしたい。

さらに、「東京圏などへの若者の人口流出」の表現は、囲い込みという

ことではなく、県外に出ても、いずれ帰って来ていただきたいということも含めての表現である。言葉が足りないかもしれないが、そういう思いである。香川県では、高校卒業後、県外の大学へ進学される方が多いという状況がある。その年齢の方々に、囲い込みということではないが、まず香川県内の大学の魅力を高めることで、県内の大学に通っていただきたいという取組を県も含めて取り組んでいこうということである。なお、この部分は、現在修正中であり、「・・・地域の魅力を高めるとともに、出生率を向上させ、東京圏などへの若者の人口流出に歯止めをかける・・・」と表現を改めようとしているところである。

(委員)

宣言(案) 7ページ図表7の連携中枢都市【高松市】の欄に香川県小児救急電話相談とあり、横の連携市町の欄に【東かがわ市】大川地区小児夜間救急医療とあるが、これは、並列に記載するものではない。連携中枢都市【高松市】の欄には、[第1次] 高松市夜間急病診療所を入れるべきである。また、「香川県小児救急電話相談」は、数年前から対象に成人も含まれるようになっており、「香川県救急電話相談」として県が運営しているものであうが、記載するのであれば別の枠にすべきである。高松市夜間急病診療所は、診療所であり、救急病院の範疇に入らないが、高松市が行っている1次救急において、一番大事なものは、この夜間急病診療所である。また、患者の1割5分の方は近隣市町の方でもあり、これは記載すべきである。

議題(2)「瀬戸・高松広域連携中枢都市圏」の取組事業等について

【別添資料により、「瀬戸・高松広域連携中枢都市圏」の取組事業等について事務局から説明】

(会長)

本日は、個別具体的な意見をいただきたい。後で、会長として、全体をまとめて、この懇談会としての大きな方向付けを行っていききたい。

(副会長)

「圏域全体の経済成長のけん引」と「高次の都市機能の集積・強化」については、行政として取り組む際、県との連携なしにはなかなか前に進まない。想定される圏域(香川県の東半分)を踏まえ、県との連携の枠組みを含めた全体の展望についてどこかに書き込めないのか。

(委員)

キーワードとして「誘導」が大事になってくる。広域というかなり広い範囲の中で、中心部に、高齢社会に必要な、医療福祉などの特定施設を容積率の緩和などにより誘導してくる必要もでてくるであろうし、また、全体で言えば、人口密度が低い方が行政サービスは上がってくるわけであるから、人口密度を一定に保つような誘導政策も今後、必要になってくる。

(委員)

県との連携という意見もあったが、そもそも定住自立圏は、県が縦割りでできない部分を、市町が連携して対応していこうというものであったと解釈している。

(事務局)

連携中枢都市圏については、それぞれの自治体が様々な事業を行う中

で、1つ1つの事業において、連携してうまくできるものがあるのであれば、連携協約という形で約束事において、連携して事業に取り組んで、お互いがより良くなっていくとするものであり、本市もそういうスタンスである。

(副会長)

「圏域全体の経済成長のけん引」や「高次の都市機能の集積・強化」という分野は、上位の県との連携を明確にした上で、取組事業を書いていく方が分かり易いのではないか。

(事務局)

連携中枢都市圏の領域がどこなのかを明確にする必要がある。平成の大合併によって1,800の自治体に集約されたが、まだ、地方の問題が解決されず、人口減少という課題もある中、今、広域連携という手法が問題提起されている。広域連携という手法において、今の行政制度の中で、自身の弱い部分を近隣との連携によってどのように補強していくのかということが広域連携のテーマである。

ビジョンの理念をまとめていく中で、連携中枢都市圏がどういう領域を狙っているのかという部分を我々なりに分かりやすく定義する中で、取り組む事業について記述していくように努めたい。

(会長)

議論が基本的な考え方に戻りすぎている。もう少し個別具体的な事項の指摘をお願いしたい。その方が建設的である。

(委員)

連携中枢都市圏に係る取組事業(案)一覧にある取組の中で、地域公共交通におけるICカードの利用が書かれているが、現在の利用が少し広がった程度の内容と思われる。インバウンドで、スイカなどJR系のカードを、地方でも使えるようにする取組が各地で行われ始めている中で、さらに踏み込んだ取組を検討いただきたい。

(委員)

高松市はコミュニティに力を入れてきたと思う。人口減少などいろいろな課題に直面しながらも、その特徴を維持していくということを考えてはどうかと思う。

圏域全体の経済成長のけん引に関する大学との取組が少ないと感じる。そこで、香川大学との連携などをうたってもよいのではないか。また、圏域全体の生活関連機能サービスの向上の中で、教育・文化・スポーツの取組として、故郷学習の機会提供という形で、この郷土を好きになるような仕組みを入れ込んでもよいのではないか。さらに、環境の取組として、低炭素化社会に向けた取組やESD(持続可能な開発のための教育)の視点を取り入れた、既存の環境にとらわれない環境教育に対する取組に支援できるような仕組みを書いてもよいのではないか。

なお、宣言(案)について、コミュニティセンターに関して、記載できるのであれば、これまでの取組のアピールの意味も込めて、記載してもよいのではないか。また、環境教育施設についても自然体験の施設などを可能であれば記載してはどうか。

(委員)

地域でのコミュニティバスの需要が増加してきている。将来的には、圏域内のコミュニティバスの乗車券を共通化できればよいのではないかと考

えている。

(委員)

綾川町では新駅の整備をまちづくりと一体として行い、新駅をまちの核として使い成功している。そういう例を参考に、駅を核とした、まちづくりも検討していただきたい。それに合わせて公共交通網を考えていくことも大事である。既に高松市で取り組んでいるが、連携市町も一緒に考え、意見交換できれば、交流の促進にもつながるのではないかと思う。

(委員)

産業振興では、実務面を請け負う商工会議所、商工会、中央会などの組織をうまく束ねていく施策を行っていただけることを期待したい。

(委員)

圏域の経済成長のけん引に関しては、知見を深めるような事業が多く、そういう分野は大学との連携がしやすいかもしれない。しかし、市が行う事業として、根本的なところ、つまり雇用を増やす政策があってもいいのではないかと思う。また、生活機能に関する施策において、保育所の広域入所があるが、これは、実際行ってみると、特定の保育所に希望者が集中するなど、うまくいかないケースが多いので、圏域全体の保育所施設を充実していく方が良くと思う。

(委員)

高松市は中心市として、特に、生活関連機能サービスの向上への取組を期待したい。

(委員)

今の高松市の公共交通の状況であれば、拡大よりも、高齢者に配慮した、地域の買い物視点や日時用生活を支えるような方向を考えるべきだと思う。また、コミュニティの施策についても必ずしもうまくいっているとはいえないと思っているので、今後の在り方についてももっと考えていく必要がある。

(委員)

公共交通やコミュニティの在り方は、行政の施策だけを問題とするべきではない。我々住民1人1人にも問題があると考えべきである。

(委員)

環境の施策に関して、香川県は太陽光発電に非常に適したところであるにもかかわらず、そういう観点の議論が足りない。蓄電池の機能も上がってきていることから、太陽光を地産地消する仕組みを検討してはどうか。

(副会長)

「圏域全体の経済成長のけん引」と「高次の都市機能の集積・強化」の取組事業が少ない。宣言(案)4ページの図表3には、圏域内の産業の数しか記載されていないが、圏域内には、日本を代表する産業が各市町にある。そういう産業(企業)のパワーを引き出して、圏域を引っ張っていくような取組の仕方が、産・官連携の重要なところではないか。

(委員)

宣言(案)9ページ、図表10の放送のところで、連携中枢都市【高松

市】の欄が、「日本テレビ系列・・」という書き方になっている。放送局は系列ではあるが、独立した免許を持った独自の会社なので、これは失礼である。西日本放送とか瀬戸内海放送と表記すべきである。さらに、ラジオ局が記載されていない。西日本放送ラジオやFM香川、コミュニティFMもあり、記載する必要があるのではないか。また、10ページの資料館等のところに、瀬戸内海歴史民族資料館の記載がない。現在は県立ミュージアムの分館になっているため除外したのかもしれないが、この施設は、公共建築百選にも選ばれる名建築である。是非、表記していただきたい。

(会長)

まだまだ、言い足りないことがあると思うが、後程、事務局にメール、ファックスにて事務局にお寄せいただきたいと思う。

議題(3)その他

【今後のスケジュールについて事務局から説明】

(会長)

本日の会はこれをもって終了する。